大妻女子大学博物館の施設と所蔵資料を活用した大学教育の可能性に関する基礎的研究

A basic study on the possibilities to university education utilising Otsuma Women's University Museum Facility and the museum collections

是澤 博昭[1]，下田 敦子[2]，中川 麻子[3]，須藤 良子[3]
Hiroaki Koresawa[1], Atuko Simoda[2], Asako Ngagawa[3], Ryoko Sudou[3]

[1]大妻女子大学博物館，[2]大妻女子大学人間生活文化研究所，[3]大妻女子大学家政学部ライフデザイン学科

キーワード：大学博物館，大学教育
Key words：Univesity museum, University education

1．研究目的

大妻女子大学博物館は，これまで主にその活動が展示公開と館園実習施設に集約されたために，博物館施設及び所蔵資料をとおした学内教育への利用については必ずしも活発に行われてこなかった．

本研究は，生活文化という視点から人間の営みを解明するために文献資料とともに物質資料を照合し検証する研究に理解がある学内の研究者が集まり，大妻女子大学博物館の所蔵資料及び施設の活用と未来について多方面から検討し，本学の建学理念と今後の女子教育あり方を視野にいれた，将来取り入れるべき教育システムを構築することを最終的な目的とする．

これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議による「新しい時代の博物館制度の在り方について」の報告書（平成 19 年度）では，「これまで以上に大学と博物館の連携・協力を緊密にし，その内容を精査することが求められている．

大妻学院創設者である大妻コタカは，広島県に生まれ，和洋裁縫女学校（現・和洋女子大学）などに学び，明治 41 年，四谷に私塾を開き，それが大妻女子大学へと発展する．「自立し社会に貢献する女性」を輩出することを目標に，コタカは生涯を女子教育に捧げる．

そのような事情も手伝い，本学博物館が収蔵するモノは，本学の創立者大妻コタカと大妻良馬の生涯と大妻学院に関わる資料，及び卒業生や本学教職員より寄贈された，本学の女子教育の伝統を体現する手芸に代表される生活文化に関連する資料を多数所蔵している．モノは素材や形態などの物質的な側面とともにそれらがつくられた時代・地域・技術，さらにそれらに与えられた役割や用途，社会的な意味や価値など，文献資料にはあらわれない様々な情報を含んでいる．このような多様なモノに光をあてることで文献資料と照合し，多角的に考察することで，人々の生活や文化を複合的に検証し，明らかにする可能性を秘めている．従って大学博物館に収蔵された多種多様な資料を，できるかぎり大学教育の場で「活きたもの」として学内で広く共有できる教育研究の基盤を形成することに取り組むことは，110 周年を迎えた今，大妻女子大学博物館に課せられた，今後の使命であるといってもよい．

その第一歩として博物館学芸員養成課程にとどまらず家政学部をはじめとする大学の専門教育に貢献するために，本学博物館の活用の可能性をさぐるための基礎的な整理と検証をおこなう．

２．研究実施内容

基礎的な整理と検証を，次の 3 点を中心におこなった．

① 大学博物館の現状把握と関係者と意見交換

博物館運営と大学との連携という問題を中心に，設備・人的資源・企画展やイベントと授業の関係・教員，学生の関わり，地域貢献等の視点から，本学と類似する設立経緯を有する東京家政大学の関係者を招聘し，本学において，上記の視点から研究会を開催した．

それをふまえて各共同研究員が分担し，武蔵野美術大学・京都工芸繊維大学・関西学院大学の各博物館の担当者から聞き取り調査を実施した．

② 大学博物館に対する認知と利用実態の把握

本学学生の大学博物館の認知度と利用の実態，および展覧会・イベント・ワークショップへの興味関心，他の博物館・美術館の利用など，500 枚程度のアンケート実施し，学生の現状と傾向を把握した．なおアンケート実施の該当授業は，博物館養成課程・被服系・デザイン系，及び美術系・児童学系の共通教養科目である．

③ 本学博物館活動への連携

2019 年 2 月の本学の館園実習において，館蔵資料の取り扱いに関する演習に複数の共同研究員が参加し，将来その資料を有効活用することに貢献できる学生の養成にも携わった．

３．まとめと今後の課題

① 各大学博物館の現状を把握した結果，大学博物館の役割とおよそ次のような傾向にあることが推測された．

大学の所蔵資料及び，関連資料の収集の調査研究を前提多くの館が前提としながら，その活動の方向性として，次の 3 点に分類される．

A. 博物館課程と連携した学生の館園実習施設
B. 大学史や関係者の研究調査の発表を中心とする展示活動
C. 上記 A.B の要素を兼ねた総合的な運営

本学博物館は，A.B の方向性をもつ博物館に比較しても学芸員数・展示予算規模等の極めて貧弱である．

例えば，東京家政大学博物館では，常設展示のほか，企画展を年に 2 回学内外の資料に行っているが，スタッフは 10 名（館長・事務長・学芸員の資格をもつ職員 2 名・学芸員資格を持つ契約職員 4 名・アルバイト 2 名）の陣容であり，教育部門との連携し館園実習を受け入れている．本学と同じ年間 50 名の館園実習生を受け入れる武蔵野美術大学も 10 名（課長・学芸員 3 名・任期付き学芸員 6 名）である．

円滑な博物館運営のために，予算・人員等の問題を勘案して，その活動の方向性をどこに置くのか．そのための具体的な措置等を，これらの施設モデルに議論する必要性が求められる．

②学生アンケートの結果から，大妻の学生が本学の博物館に認知度，利用の実態，また博物館に興味があるかないか，興味のない場合どのような博物館であれば足を運びたくなるかといった，学生目線の要望を把握した．

本学博物館への利用の実態 30%程度であり，博物館学芸員課程履修者以外は，総じて低い．利用者の回数も 1 回が最も多く，それはオープンキャンパス，授業での利用に限られ，自白的で，日常的な利用実態が少ないことが判明した．

博物館に興味のある学生は 4 割弱にとどまるが，これは本学博物館を想定した回答も含まれていることも予想される．他の博物館などの展覧会に行った経験のある学生が 75%を数えるなど，博物館・美術館に対する潜在的な関心を持つ学生がいることは十分推測される．何らかの方法で関心を掘り起こす余地が残されている．

また本学博物館に求める展示は，ファッション関係（63.9%）・アート（46.3%）・デザイン関係（44.1%）が多く，イベント・ワークショップへの関心の高さも同様の傾向がみられる．

博物館展示の情報源は，ポスター（44.4%），HP(36.2%)にほぼ集約されており，情報の発信が不足していると感じる学生がほぼ半数の 47.4%を数える．

本年度は，学生アンケートで現状把握をし，他大学との関係と問題点を話し合う等，大学間での

協力などができる関係作りが構築した.
今後の課題として,

①本年度の成果を踏まえてさらに地域連携との可能性を探るとともに，近隣の千代田区在住の方にもアンケートの範囲を拡大することで，本学の博物館と地域連携の可能性を模索する.

②授業やゼミ内で，学生対象のワークショップ，博物館資料調査演習，展示企の提案，展示練習，博物館イベント企画運営等を実施するとともに，参加学生に対して博物館への要望・意見，アイデア等のアンケートを行う.

上記の作業をとおして，各共同研究員間で問題意識と方向性を共有するともに，学生の意見から，博物館の教育現場への活用法を検討することで，次年度以降の本格的な研究への橋渡しをすることを目標としたい.